38）９月私立熊本医学専門学校助教授に任命され漸く生活が安定した。それ以前は彼の遍歴時代と言えよう。私立熊本医学校が私立熊本医学専門学校として医学界に新しくスタートを切ったのは前年４月。谷口長雄校長は教授陣の充実をはかり、独語専任の教師として、以前熊本医学校設立当時一時勤めた、旧知の上田に白羽の矢を立てたのであった。彼は以後ずっと熊本にあってドイツ語教育に携わることになる。私立の熊本医専は大正10年県立に移管され、熊本県立医学専門学校となり、さらに翌年昇格し熊本医科大学と改称された。彼はその予科教授に就任した。だが３年後1923年（大正14）９月熊本薬学専門学校（現・熊大薬学部）教授に任命された。そして1941年（昭和16）２月28日を以て依願退職するまでその地位にあった。亡くなったのは日本の敗戦が濃くなった昭和20年３月22日である。墓は熊本市池田３丁目162番地の富尾墓地の上田家墓地にある。戒名「積善院殿植譽浄本居士」。上田家の菩提寺は熊本市細工町３丁目34番地の阿弥陀寺。

上田には著書や論文は無かったようだ。専ら教室でドイツ語を講義することに終始した人だった。だが語学教師の場合、その功績において著書の無い人は必ずしも著書のある人に劣らない。人となりについて長男の上田新氏（長崎市在住）は筆者宛の私信の中で次のように述べている。

「天性明るい性格で比較的楽天的であった印象があります。声が大きく哄笑するのが印象的でした。又諧謔を飛ばしては家中の者を笑わしていました。家庭にあっての父は正に慈父そのもので、子に対しても寛大でした。頑固といった処がなく、何でも自由に話が出来る人柄でした。幼時父が話してくれたグリムやアンデルセンの童話が尚耳に残っているような気がします。」

また「本当に父は経済的には苦しんでいました。父は二男でしたが他の男兄弟が死亡した為に没落士族の無一文の家を家督相続し、祖母及び寡婦となった伯母を引き取り子供五人を養育し、…（中略）母が屡々質屋通いをしていたことを子供心に知っています」と語り、家計が苦しかったことを告白している。それでも茂次郎は謡曲（喜多流）を嗜み、子供を金峰山の散策や、江津湖の魚釣りに連れ出すなど心の余裕を失なわなかったという。

教壇上の上田については資料がなく紹介できないが、「ドイツ語のモーンヤン先生」と呼ばれて学生たちに親しまれた。学生たちの面倒もよく見、卒業後に上田宅を訪れる者も多かったようだ。

明治以来、昭和前期まで熊本に於けるドイツ語教育の中心は云うまでもなく第五高等学校であった。そこでは教師の数も多く、まことに多士済々であった。しかし専門学校の果たした役割も忘れてはならない。その際二人の教師の存在が大きい。一人が熊本医専・医科大学教授の魚住衛（まもる）であり、もう一人が今回取り上げた熊本薬専教授の上田茂次郎であった。

佐賀好生館々長 大黒安三郎と和独辞典

大黒安三郎（おおぐろ・やすさぶろう）は1870年（明治３）９月18日、岡山県真庭群勝山町に生まれた。明治28年第一高等学校三部（医科）を卒業、東京帝国大学医科大学に進んだ。明治33年11月大学卒業後、同年12月より34年12月までベルツ内科に入り、内科学を専攻。1902年

（明治35）５月23日、佐賀県立病院好生館副館長に任ぜられ、内科部長を担任した。以来種々臨床上の業績を挙げ、特に佐賀県に多いワイル氏病について研究した。そして明治38年４月１日を以て好生館第三代館長に就任した。二代館長青木周一の退任の翌日のことで、もとより副館長からの昇任であった。次いで医業視察を兼ねてベルリン大学に私費で留学した。ラウク（M. Rauck）氏の『ドイツ語圏における日本人の名簿』によると、同大学での在学期間は1908年（明治41）11月21日から翌年９月20日までとなっている。同年10月25日帰国。以前からの研究をまとめ、それを主論文として九州帝国大学に提出、明治45年２月24日、医学博士の学位を授与された。彼の人となりについては、『好生館創立三十五年記念誌』（昭和５年）に、「性格は剛直で、人に屈せず」とあり、名声があったが、1915年（大正４）10月21日、急性盲腸炎により急逝した。享年46。翌日の『佐賀新聞』に掲載された死亡記事によると、同月13日までは平常通り出務し、幾多の患者を診療したほどであったが、同夜就寝後、疼痛を覚えるや病状急変し、たちまち危篤に陥った。それで白井鉄治副館長はじめ館員達が殆ど詰め切りで、その上九大の三宅速博士の来診まで乞うたが、その甲斐がなかったという。

大黒安三郎

ところで大黒には、好生館に赴任する一年前、つまり彼がまだ東大三浦内科で勉強していた頃の明治34年に大倉書店から刊行したドイツ語辞典がある。文学士登張信一郎・医学士大黒安三郎・山田基共著『新和独辞典』（Neues Japanisch＝Deutsches Wörterbuch von M. Yamada, S. Tobari und Y. Oguro）がそれだ。横２寸７分、縦５寸、厚さ７分。初めに「序」「凡例」「日本の字音」「本書引用略語解釈」を載せ、次に辞書の部776頁がある。巻末の付録（34頁）には、1888年、プロイセン文部大臣が発布した正書法の説明と例語を載せている。

著者の一人、登張信一郎は当時、高等師範学校独語教授。竹風と号し、新進の独文学者・文芸評論家として知られた。山田基はまだ東京帝国大学医科大学の学生であった。従って、この辞書は登張が中心となり、ドイツ語の教え子の大黒と山田の協力を得て纏めたものであろう。登張は以前、医学志望者が多く学んだ本郷の私立独逸語学校の講師を務めていたことがあり、そこで二人を教えたことがあったのではあるまいか。

「序」には次のように述べられている。

独逸は学芸の国だ。学芸に志す者は専門の如何を問わず独逸に教えを仰がねばならぬ。そこにドイツ語を学ぶ必要性がある。近年我が国でもドイツ語学習が非常に盛んになったが、進歩は遅い。その理由は良い辞書がないからだ。「独逸語の難きを易くし、その発達をして快速敏活ならしむるは、一に良辞書の編成にありと信ずればなり。」それでも独和辞書はどうにか我慢できるが、和独辞書に至っては僅かに平塚氏等の編著があるだけで、まことに遺憾だ。このような刻下の必要に応じて本書を著した。日本語の一切を網羅することはこの小冊子には出来ないが、「唯々繁簡宜しきを得、取捨規を失はざることに於て、著者は満腔の熱心と誠意とを披露せり。」

文中、和独辞書には平塚氏等の編著（明治28年刊行の『新撰和独字彙』を指す）があるだけ

と書いているが、これは正確でなく、既に明治10年に『和訳対訳辞林』（ルドルフ・レーマン校訂、著述者・斎田訥於、那波大吉、国司平六）という立派な辞書が出ている。ただし、これは既に入手困難になっていた。

「序」には「著署識」とだけあって具体名はないが、次に述べる「凡例」と共に、文体から推察して登張信一郎が書いたものであろう。

大洋を航行する際の羅針盤の如きものだとして必読を求めている「凡例」は、この辞書の性質をよく説明している。

「本辞書は、日本語の悉くを、網羅せる者にあらず、又日本語の悉くを網羅せんとするの目的を以て作られたるにあらず、只だ普通一般に用ひらるゝ日本語，即ち日本語を解する者の、必ず知得せざるべからざる語を集め、それを恰当（こうとう）せる独逸語に訳したる者なり、故に本辞書は大家先生の需に応ずる者にあらずして、現今此種の辞書に向て、渇欲せる初学者の希望を充さんとする者なり」

と前置きし、ａからｇまで箇条書きしているが、ここでは二例のみ引用しよう。「ｃ日本語には、地方により、又同一地方に於ても種々異りたる呼称をなさゞる者多ければ、己の求むる語が一箇所に見出されずとも、それに失望して忽ち本辞書を抛棄するの愚をなす勿れ、寧ろ己の求むる語と同意義を有せる他の語を求むるに如かず」「ｄこの求むる語を発見したる時は、次に１、２、３等の数字の下にある独逸語を選択すべし、若（も）し然らざる時には己は志と、大に隔離せる語を用ふるの恐あるべし」

和独辞書としてはこの後、国吉直蔵著『和独新字林』（明治36年、独逸語学雑誌社）、岡倉一郎編『新訳・和独辞典』（明治45年、金刺芳流堂）、小田切良太郎・ウォールファールト共編『註解和独辞典』（明治45年、冨山房）が刊行された。特にそれまでの和独辞典を総決算した観のあった『註解和独辞典』は好評で、長くドイツ語辞書界に君臨した。

最初の女性独語教師　ゾフィー・ビュットナー

ゾフィー・ビュットナー

今でこそ女性の外国人教師は珍しくないが、明治・大正期においては稀であった。例えば旧五高75年の歴史で外国人教師は30人に達するが、そのうち女性は僅か二人しかいない。その最初の一人がゾフィー・ビュットナー（Sophie Büttner）であった。もう一人はキャサリン・ギューロック・ウッドローといい英語の嘱託講師（今で言う非常勤講師）であった。彼女はビュットナーより３年遅れて就任した。ところで、ビュットナーといっても今では知る人は殆どいないであろう。彼女は明治末から大正初期にかけて鹿児島の七高造士館と熊本の五高の傭外国人教師として独語及びラテン語を教えたほか、ベルリンでも主に日本人留学生に独語を教えた人である。ともかくビュットナーは全国的に見ても高等